Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-31

『貨幣の哲学』におけるジンメルの分析視角

徳田, 剛

(Citation)
社会学雑誌,15:157-166

(Issue Date)
1998-03-01

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010924

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010924

KOBE UNIVERSITY

『貨幣の哲学』におけるジンメルの分析視角

徳田剛
神戸大学大学院文化学研究科博士課程

（一）はじめに

近年のジンメル再評価の動向において特徴的なのは、専門諸領域における分業的なジンメル研究からの脱却である。これまでのジンメル研究は、社会学・哲学・美学などの諸領域において、それぞれ独自の関心と方法に基づいて行われてきたのであるが、多彩な内容と考察方法に基づく彼の諸業績を、専門領域の枠組をこえた形で取り扱うことが、ここで目指されているのである。この一連の再評価の潮流は、さらに次の二つのポイントに集約されうる。一つに、彼の諸業績全体を視野に入れ、それらに通底する問題関心を措定することで「包括的なジンメル像」を探求する総論的な試みであり、もう一つは、専門諸領域における個々の関心を保持しながらも、ジンメルの業績を従来とは異なる文脈から読み込んだり、なじみのない作品をとりあげることで、解釈枠組の刷新をめざす各論的な傾向である。(1)

こうしたジンメル研究の動向をふまえると、それと並行して『貨幣の哲学』という著作への関心が高まっていることも理解できる。この著作は、表題が示すとおり「貨幣」という、通例経済学で扱われるテーマを「哲学的に」考察するという特異なスタンスをとっている。そして内容的には、経済学的な領域にとどまらず、社会学・心理学・美学・哲学などの諸領域の成果もふまえながら構成されている。したがって『貨幣の哲学』は、その考察内容と分析視角の複雑さゆえに、従来扱いづらい作品とされてきた。しかし同時に、多様な考察内容を有しつつも、一つの主題から体系的に論じられた数少ない著作ゆえに、包括的なジンメル像の探求、あるいは彼の業績の再解釈をめざす近年の研究動向において、重要な題材として評価されるのである。

本論は、こうした動向における問題関心をある程度共有しながら、改めて『貨幣の哲学』におけるジンメルの分析

視角と著作全体の構成に焦点を当ててみたい。こうした基礎論的な課題においては、この著作のみならず、それ以外の諸業績にも通底するような、ジンメルの統一的な問題関心および考察方法と対峙することとなる。また、各論的な関心からこの著作の意義を問う場合にも、この問いは重要な示唆を与えるであろう。例えば社会学サイドから『貨幣の哲学』を読みこむという立場を想定してみよう。『貨幣の哲学』を構成している多くの準備論稿が執筆された一八九〇年代は、ジンメルにとって「社会学的にも多産な時期」[2]であり、同時に多くの社会学的な論稿が執筆されている。そうすると、時期的に考えても、『貨幣の哲学』の内容を「社会学的な採石場」[Dahme, 1993, S. 47]とみなして、そこから成果を引き出す措置は、決して的外れではないはずである。しかし、O・ラムシュテットが示した「なぜ『貨幣の哲学』となったのか、そしてなぜ『貨幣の社会学』とならなかったのか」[Rammstedt, 1993, S. 19]という問い、すなわち、対象の「社会学的考察」と「哲学的考察」という二つの認識視角の相違が示されて初めて、『貨幣の哲学』を社会学的な関心から取り扱うことが可能となるであろう[3]。

このような問題意識に基づいて、本論は『貨幣の哲学』の分析視角を以下の手順で素描したい。まず第二節では、『貨幣の哲学』の序論を検討し、その対象と考察方法をジンメル自身の記述に従って確認する。だが、『貨幣の哲学』の独特の考察方法と射程は、この数頁ほどの序論における若干の記述を除けば、ほとんどジンメル自身によって論じられていない。それゆえ我々は、彼自身による記述をふまえると同時に、若干の補足に基づいてこの課題を取り扱う。そこで第三節では、『貨幣の哲学』の分析視角をより明晰にするために、その準備論稿のひとつである「社会学的美学」で示された認識方法をとりあげる。ここでは『貨幣の哲学』の方法と射程をより明晰に理解するために、ジンメルの業績全般に通底すると考えられる、ジンメルの個人観の探求を試みる。

(二) 貨幣を「哲学」すること

ここで我々は『貨幣の哲学』の分析視角とその構成について、ジンメルが直接言及している序論の検討を足掛かりに議論してゆく。そこで、まずその表題に示されている「貨幣を哲学する」というアプローチが、実際にどのような考察方法と意図に基づいているかを確認しておきたい。

ジンメルは『貨幣の哲学』の序論において、この著作がもつ意図と方法の特殊性について次のように弁明している。『貨幣の哲学』という表題が示しているのは、貨幣の歴史的な成立過程を検討したり、貨幣のはたらきやそれに基礎

づけられた経済秩序を考察する、経済学的な意図に基づいていないことである。対象としての貨幣や経済的な諸客体は、一方で、いかなる経済構造に基づいているかという経済学的観点から扱われる。ジンメルは、この視角の正当性を認めつつも、同じ対象を別のアプローチから取り扱う。つまり貨幣という対象について、「その諸前提を非経済的諸概念および諸事実において吟味し、その諸結果を非経済的諸価値および諸連関に対して検討する哲学的考察の対象」[PdG, S. 11, 一四頁]として取り扱うのである。

ここで示された、貨幣の「哲学的考察」をより詳細に見てみよう。貨幣の媒介作用は、無数の客体の交換比率を示し、それらを交換可能性のもとに関係づけるが、同時にあらゆる個人が、貨幣を対価として支払うことで、貨幣によって関係づけられたあらゆる客体と関係をもつことができる。こうして貨幣は諸客体のみならず、その背後に存在する諸個人をも一つの秩序へと結びつけるので、貨幣経済へと秩序づけられた諸客体のみならず、経済プロセスの担い手である個人もまた、貨幣論の射程に含まれることとなる。さらにジンメルは、個人を経済的な役割からではなく、その非経済的な側面から取り扱い、経済的事象と関連づけようとするのである。

この「貨幣の哲学的考察」において、ジンメルは二つの分析枠組を設定する。つまり一方で経済的な事象を、諸個人の心理的・社会的要因といった非経済的な諸前提から基礎づける方法であり、他方で何らかの経済秩序が、逆に個人の非経済的な側面に対して、いかなる影響と帰結をもたらすかを示す方法である。ここに示されたジンメルの考察方法は、まさに『貨幣の哲学』の前半部と後半部の位置づけに対応している。前者の分析篇においては、貨幣および経済プロセスが「その前提としての人間の価値感情、事物に対する実践、および人間の相互的関係」[PdG, S. 10, 一三頁]から基礎づけられる。そして後者の綜合篇は、貨幣を「その内的世界に対する諸作用、すなわち諸個人の生の感情や彼らの運命の連鎖や一般的文化などに対する作用において追求」[ibid.]しようとするのである。

ここまでで、貨幣というテーマの「哲学的考察」がどのようなものかを確認した。それによると、この研究が貨幣の経済学的研究でなく、個人の側から貨幣の前提条件を模索し、逆に個人への影響と作用を問うものであった。このことから、我々の課題にとって次の二つの疑問が生じる。すなわち、この『貨幣の哲学』の独特の構造が、一体どのような問題意識に基づいているのか、そしてここで貨幣という対象を論ずることの意義は何なのか、という疑問である。これらの疑問に対して、ジンメルは次のように回答する。

「……貨幣は最も外的な、最も現実的な、最も偶然的な諸現象と、現存在の最も理念的な諸能力や個人的な生と歴史的に最も深い諸潮流との間に存在する諸関係の叙述のための単なる手段、素材、あるいは例証に過ぎない。全体の意味と目的とは、経済的事象の表層からすべての人間的なるものの究極の価値と意識に向かって一つの基準線をひこうとすることのみである。」[PdG, S. 12, 一四頁]

まず、ジンメルにとって貨幣を論ずること自体は、さらなる議論への糸口にすぎない。そして貨幣の媒介作用を手掛かりに、経済的な諸現象を個人の内面の問題へと関連づけることが、彼の問題意識として示されるのである。

そして『貨幣の哲学』の全体的構成においては、次のような方法上の問題に直面する。つまり、非経済的諸条件を説明原理として貨幣の本質を問う分析篇は、個人の非経済的側面に対する貨幣の作用を扱う綜合篇への基礎づけととらえられるが、同時に後者の考察内容が前者の経済プロセスの議論をさらに基礎づけるものとして扱われうる。したがって、それぞれの議論が、他方を規定すると同時に、規定される関係として示され、ジンメル自身認めているように、「認識作用の実践に対しては、果てしない相互性のうちに展開」[PdG, S. 13, 一五頁]されることとなるのである。それではジンメルは、いかなる意図に基づいて、この著作独特の構成と考察方法を採用したのであろうか。この問題に対しては、次のように弁明される。

「これらの諸研究の統一性は、特異な知識内容に関するある種の主張と、順を追ってすすめられてゆくそれの証明とのうちにあるのではなくて、生のあらゆる個別性(Einzelheit)にそくして、その意味の全体性(Ganzheit)を発見してゆく可能性を明らかにすることのうちにある。」[PdG, S. 12, 一五頁]

こうして我々は、『貨幣の哲学』の序論から、ジンメルの問題意識と考察方法を確認しようと試みたが、問題として残されたのは、「生の個別性」からその意味の「全体性」を見いだすこととして示された、ジンメルの問題関心である。そしてこのことが理解されることで初めて、テーマとしての貨幣と分析枠組が理解可能となるはずである。ここで我々は、ジンメルの問題意識について掘り下げるために、次節において、『貨幣の哲学』の重要な準備論稿のひとつである「社会学的美学」をとりあげる。

(三) ジンメルの個人観

我々は前節において、「貨幣の哲学的考察」という方法

が、貨幣およびそれに基礎づけられる経済秩序と、個人の非経済的な側面という二つの異なる対象領域を議論の前提にしている点を確認した。そして、著作の主題であるはずの貨幣は「単なる手段、素材あるいは例証」として位置づけられた。つまりここでは、ジンメルが貨幣を取り扱うことによって何を示そうするのか、という疑問はいまだ十分な回答を得ていない。そこで我々は、先にジンメルが対置したもう一つの問題領域、すなわち個人という対象がいかなる視角のもとに扱われるか、という問いを立ててみたい。この問題を検証することによって、「一方は貨幣の本質を一般的な生の諸条件から説明し、他方は一般的な生の本質と形成を貨幣の働きから説明するもの」[PdG, S. 11, 一三頁]として示される『貨幣の哲学』の構成と、「生の個別性」とその「意味の全体性」への問いとして暫定的に確認されたジンメルの問題意識とが、より明瞭になるはずである。ここでは、『貨幣の哲学』の重要な準備論稿のひとつである「社会学的美学」をとりあげ、そこに示された個人観から、ジンメルの問題関心と分析視角の源泉について検証する。

「社会学的美学」においてジンメルは、対象の分析視角として「シンメトリー」という美学的な概念を導入する。この概念は、その諸部分が一定の形式へと調和的に構成された理想状態を念頭において対象を取り扱う認識視角である。ジンメルによると、

「あらゆる美的動機の端緒にあるのがシンメトリーである。事物に理念と意味と調和をもたらすには、まず最初に事物をシンメトリックに形成し、全体の諸部分をたがいに調整し、それらをある中心点をめぐって対称的に秩序づけねばならない。これによって単なる自然的な形状の偶然と混乱とに対する人間の形式付与的な力が、最も明白で直接的な迅速な仕方で知覚される。」[SA, S. 201, 二三九頁]

すなわちここでは、外部からの意味づけを退けて構成要素への意味付与を自ら貫徹し、それらを完全に掌握する美的理想のもとに、対象が把握されるのである。

ジンメルは、次の例に示されるように、この説明原理としてのシンメトリーを全く異質な二つの社会形態に適用し、両者を関連づける。一方で「専制的な社会形態」においては、社会全体のシンメトリーが問題とされ、各々の個人はその構成要素としてのみ評価される。つまり諸個人は、社会全体もしくはその中心である君主への貢献において、その存在意義が示される。他方で「自由主義的な社会」では、「自己の固有の条件に従って独立に生きつくすという諸個人の理想」[SA, S. 204, 二四二頁]に基づいて、個人の構成要素を調和的に秩序づけることが目指される。ここでは、

一つの「全体」としての個人が問題とされるのである。そして社会の完結性が美的理想とされる前者において、個人の完結性は妨げられ、そして個人の完結性が理想とされる後者においては、社会全体が不調和なものとなるという形で、個人と社会全体の双方に適用された美的理想がいずれの場合も対立概念として措定されることとなる。

これらの事例から、二つの異質な社会現象が、個人と社会の完結性の対立関係のもとに説明されたが、ここでジンメルは、「全体の調和という同じ美的な魅力が、全体の中で個人を消滅させるとともに、また個人の自己貫徹にも寄与する」[SA, S. 209, 二四六頁]点にも注目する。つまりジンメルは、個人という対象を、一つの「全体」として自らを意味づけると同時に、社会全体の「部分」として外的に意味づけられる存在として取り扱うのである。ここで確認された個人観から、ジンメルの分析視角を検討するための重要な示唆が与えられる。すなわち、

「とりわけあらゆる歴史的な生のかの重大な対立、すなわち、社会にとって個人は単なる分肢であり要素であるにすぎないとする社会の組織と、個人にとって社会はたんなる下部構造にすぎないとする個人の評価、この両者の対立は、多様な歴史的諸条件の結果、こもごも優位を占め、それぞれの瞬間に極めてさまざまな割合で混ざり合っている。」[SA, S. 208, 二四六頁]

つまり、個人および社会的諸現象は、一方で社会的全体性から考察され、社会的な諸要素間の関係から説明される。他方で、個人をひとつの全体性のもとに扱う場合、諸客体が個人を取り巻く環境とみなされ、個人による意味づけから理解されるのである(4)。

ここで個人および諸対象を、社会的条件や他の要素との関係性から説明する視角とともに、他方で個人を中心とする視点に従って、それらがいかに位置づけられるかを表象するという、二つの異なる立場からの分析視角が確認された。このことは、社会全体にとっては「部分」でありながらもそれ自身「全体」とみなされる、個人像の二重性から導出されたものである。そしてこのような「社会学的美学」の検討の成果をふまえることで、前節で『貨幣の哲学』の意図として確認された、生の「個別性」をその意味の「全体性」との関連から問うという視点が、我々にとってより明瞭なものとして理解されるのである。ここで最後に、「社会学的美学」で提起されたこの視点をふまえて、再び『貨幣の哲学』の構成と分析視角を総括したい。

(四) 小括と展望

本稿において我々は、『貨幣の哲学』の全体構成と分析視角を検討するというテーマに従って、まず序論から問題の所在を確認した。さらに、「貨幣」とともに重要な対象である「個人」の取り扱いを探るために「社会学的美学」論文をとりあげ、ここで示された個人観から、二つの異なる分析視角が導き出された。それによるとジンメルは、シンメトリーという美的概念を社会と個人の双方に適用し、両者の立場から諸対象を考察しようとする。それによって対象が、一方で社会における諸要素の相互関係から説明され、他方で個人によっていかに位置づけられ、体験されるかという観点からも示される。

こうして前節で示された、対象を「全体性」概念から把握する美学的な考察様式は、我々の問題関心、すなわち個人の「個別性」をふまえつつ、「その意味の全体性を発見」しようとするジンメルの意図を理解する際に重要な示唆を与えてくれる。つまり『貨幣の哲学』においてジンメルは、社会的諸関係や経済条件から説明する社会科学的アプローチに、一個人の立場から表象する美学的アプローチを併置することで、対象を多角的に論じようとするのである。

ところで、この「全体性」という美的概念の適用は、『貨幣の哲学』において、個人を自己完結した存在として提示する重要な契機である。しかしこの場合、個人の全体性は社会全体との対立図式のもとに示されることとなる。すなわち、

「芸術の完全な意味は次のことにある。すなわち数千の糸によって現実と結び付いた依存性をもつ偶然的な断片的現実から、それ自体に宿る全体性を、一切の外的な存在を必要としない小宇宙を、形成することである。個人と超個人的な存在との間の典型的な葛藤は、美的に満足すべき像たらんとする両者の調和し難い努力として表示しうるのである。」[PdG, S. 691, 三四八頁（強調引用者）]

そして近代社会における貨幣経済と個人の関係が問われる場合、両者の対立によって個人の全体性が、実際には全く実現不可能なものとして把握される。つまり、貨幣が無数の客体を関係づけ、個人が概観しうる規模よりもはるかに巨大な経済秩序を構成するのに対して、個人はそのごく一部を占める存在にすぎず、しかも代替可能な経済的役割の担い手としてのみ評価される。すなわち個人の存立要件は、ここに経済決定論の文脈で把握されうるのである。

B・ネーデルマンは、『貨幣の哲学』が、こうした「疎外論」的な文脈で扱われる傾向を問題視する。この文脈によれば、個人は常に「生の無意味さ」において、このような経済現象を体験すること、そして個人は、社会・経済構

造の変革によってはじめてこのジレンマから救済される、という見解へと結びつく。しかしネーデルマンは、ジンメルの個人観の本質が次のような点にあることを強調する。

「近代人は、まさに意味なき生に安住できないことから、その創造的な原動力を受け取るのである。全く疎外された人間とは逆に、その世界への態度は、生の意味と無意味さの認識の間を行き来しながら揺れ動く。」[Nedelmann, 1993, S. 413]

すなわち個人は、貨幣経済とのかかわりにおいて直面する「生の無意味さ」を「文化的生産」へと転換する能力をもつ存在としても把握されるのである。我々は、個人の内面を経済活動の原動力としての実践的意義から問う、このような分析視角を、経済的事象を個人の「体験」として読み替える視角とともにふまえることによって初めて、『貨幣の哲学』の分析視角における二つの方向性を視野におさめることができるのである。

ここに『貨幣の哲学』の分析視角は、「概念上対立する認識原理のこのような交替と錯綜」として特徴づけられる。つまり『貨幣の哲学』では、「経済活動を精神的文化の原因のひとつ」[PdG, S. 13, 一五頁]として取り扱う手法と、逆に経済活動を「より深い諸前提や諸潮流によって、さらには心理学的、いな形而上学的諸前提によって」[ibid.]基礎づける手法が採用される。この前提に基づいてジンメルは、貨幣によって秩序づけられた「事物の統一性」を「実践的かつ生き生きした（lebendig）もの」[PdG, S. 13, 一六頁]として示そうとするのである。

以上において我々は、『貨幣の哲学』の多様な考察内容を扱うための前提として、そこにおけるジンメルの問題意識と方法を概観した。そこで確認されたのは、『貨幣の哲学』の方法が、一方で貨幣および経済的事象が個人の存立要件をいかに規定するか、という観点から考察され、他方で経済プロセスが個人の実践によっていかに条件づけられるか、という反対の方向をもつ説明原理から取り扱われることであった。そしてその対象は、貨幣であると同時に個人でもある。無内容ゆえ、あらゆる意味づけに従う貨幣は、個人による一定の意味づけに従わない客体である。しかし貨幣の機能によって、あらゆる客体が実践の対象として取り扱われうるために、貨幣は個人の「全体性」という理想にとって、最も敵対的であると同時に、実践的には最も意義深い対象とみなされる。そして、貨幣によって基礎づけられた経済秩序や社会生活が「個人に対してもたらした自由と苦悩」[Dahme, 1993, S. 60]が、この著作を貫くジンメルのテーマなのである(5)。

註

（1）　近年のジンメルの研究動向については、［廳、一九九五］および［山之内、一九九三］を参照。

（2）　F・テンブルックは、ジンメルの「社会学時代」が「貨幣の哲学」にいたる一〇年間でピークを迎えた、という見解を示している［Tenbruck, 1975, S. 592］。また、『貨幣の哲学』から社会学的な文脈でとりあげる試みについては、［Dahme, 1993］を参照。

（3）　『貨幣の哲学』の成立過程を問う場合にしばしば指摘されるのは、ジンメルのキャリア上の問題から、この時期社会学から距離をとろうとしていたことである（［Dahme, 1993, S. 48-9］参照）。しかし我々は、貨幣を「哲学的」に扱う方法がこの著作の意図にとって、社会学的アプローチよりも適合的であった、という見込みに基づいてこの問題を取り扱う。

（4）　社会学の文脈においては、『社会分化論』で示されるように、原則的には「個人の地位と運命」を「他の個人とともに社会的な全体に結合する相互作用」［SD, S. 20, 二五頁］から説明する方法が採用される。しかし、社会認識のアプリオリを論じた、「社会はいかにして可能か」において、個人を社会的諸関係の担い手として扱うこの社会学的な分析視角だけでなく、対象を「個別的な生のカテゴリーのもとで、個人の体験として」考察する視角の重要性を認めている箇所がある［SO, S. 55, 五一頁］。

（5）　このようなジンメルの対象認識の特徴は、ネーデルマンによって以下のように総括される。すなわち「ジンメルに典型的な特質は、対立するメルクマールの協働から生み出される。すなわち自由と不自由、近さと遠さ、意味喪失性と有意義さ（Sinnhaftigkeit）が、それらの同時的存在において近代の生を刻印するのである。」［Nedelmann, 1993, S. 413］

略号

ジンメルの著作からの引用に際して、以下の省略記号を用いた。なお一部翻訳を変更した箇所がある。

SO＝*iiber sociale Differenzierung. Sociologische und psychologische* Untersuchungen, 1890 Leipzig.（居安　正訳『社会分化論　社会学』、青木書店、一九七〇）

SA＝Soziologische Ästhetik, Die Zukunft, XVII, 1896—Gesamtausgabe, Bd. 5 S. 197-214（居安　正訳「社会学的美学」、酒田健一・熊沢義宣・杉野　正・居安　正訳『橋と扉』、二三九—二四七頁、白水社、一九七六）

PdG＝Philosophie des Geldes—Gesamtausgabe Bd. 6,（元浜清海・向井　守・居安　正訳「貨幣の哲学（上）分析篇」、居安正訳『貨幣の哲学（下）綜合篇』白水社、一九七八。なお翻訳の頁数については、S. 9-372 が上巻、S. 373-716 が下巻からの引用である。）

GG＝Die *Großstädte und das Geistesleben, Jahrbuch der Gehestiftung*, 9, 1903—Gesamtausgabe Bd. 7, S. 116-131（居安正訳「大都市と精神生活」、酒田・熊沢・杉野・居安訳『橋と扉』、二六九—二八五頁、白水社、一九七六）

SO = *Soziologie : Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, 1908—Gesamtausgabe Bd. 11（居安 正訳『社会学』（上巻・下巻）、白水社、一九九四）

参考文献

阿閉吉男、一九八五、『ジンメルの視点』、勁草書房

Dahme, Heinz-Jürgen, 1993, Soziologische Elmente in Georg Simmels Philosophie des Geldes in : Georg Simmels Philosophie des Geldes, J. Kintzelé, P. Schneider (Hg.) 1993, S. 47—87

Frisby, David, 1981, *Sociological Impressionism : A Reassessment of Georg Simmel's Social Theory*, London.

———, 1987, "The Ambiguity of Modernity : Georg Simmel and Max Weber", in : *Max Weber and his Contemporaries*, by W.J. Mommsen, J. Os-terhammel eds. p. 422-433

岩崎信彦、一九八八、「貨幣と価値—ジンメル『貨幣の哲学』を読む—」、神戸大学文学部『紀要』第一五号、二九—七六頁

Nedelmann, Birgitta, 1993, "Geld und Lebensstil : Georg Simmel- ein Entfremdungstheoretiker?" in : *Georg Simmels Philosophie des Geldes* J. Kintzelé, P. Schneider (Hg.) 1993, S, 398-418

Rammstedt, Otthein, 1993, Simmels Philosophie des Geldes in : *Georg Simmels Philosophiedes Geldes* J. Kintzelé P. Schneider (Hg.) 1993, S. 13-46

Tenbruck, Friedrich, Georg Simmel, in *Kölner Zeitschrift fur Soziologie und Sozialpsychologie* 10/1975, S. 61-99

鷹茂、一九九五、『ジンメルにおける人間の科学』、木鐸社

山之内靖、一九九三、「ジンメル・ルネッサンスの位相」、同著『ニーチェとウェーバー』、一七九—二二六頁、未来社